

私たちもぐずぐずしておれないと家を出て前の富田源吉さん宅までくると、町は避難する人々でごった返しているが、大喜田由郎さんが「津波ってはない早う来るもんじゃない。わしが沖を見てくる」と平港の加工場（現象源第二加工場）の方へ曲った途端「早う逃げえー潮が来よる」叫びながら引返して来た。いっしょに二階から降りてきたはずの祖母らの姿が見えない。しばらくためらっていると「正ちゃん早う逃げんけ。おばあさんには叔母さんらがついとる。早う早う」とのことので一団を作り、八坂橋のうえを目指して逃げる。

八坂橋の辺りまで来ると後から数台の大八車を引いて走るような音がある。橋の下の水は異様な音を立て逆流していた。これはみんな津波が進入する際の潮の音だった。春木正義さん宅の前まで来たとき、町の方でものすごい音と共に津波の襲来である。「助けてくれー。イヤー。助けろ!!」それはまさしく修羅の音であるが、どうしてやることもできない。やれやれ無事に助かったと思っただけで、急に寒さが身にしみてきた。そのはずである。着用している物は素肌の上に紺の袴一枚で素足に草履の姿である。また家族の安否が気になって仕方がない。祖母は、叔母は、従兄弟らは無事に逃げたであろうか、母や弟妹たちは？

ふと気がつくのと和田八郎さん宅の前まで来ていた。大勢の人達といっしょに和田さん宅に上げてもらい囲炉で火を焚いていたとき暖を取った。一方祖母や叔母達は杉王神社に逃げたが、貞子叔母は途中で米を取って来ると言って引き返し潮に流される。政男叔父は家族を先に避難させて自分は引き返し、先祖の位牌を持って八坂橋を目指したが、時すでに遅く久佐木さん宅（現小磯邸）の前で潮に遭い、久佐木宅の植の木によじ

登り難を免れた。第一波の潮が引いて「助けて、助けて!!」の声に近寄ってみると、貞子叔母が大きな流木に挟まれ身動きができずにいるところを、花野さん宅横で運良く助け上げられた。同様に食料を取りに帰った鈴木のおばは中磯さん宅の横まで流され、この時の怪我が元で病氣となり後年亡くなった。

夜が明けて帰途にいたが八坂橋の欄干が完全に流失しており、大谷の田圃には流失した家の残骸や小舟などが見え、西念寺の境内には流失した家財等で瓦礫の山と化していた。もちろん国道は塞がれ折重なった全壊の屋根の上を伝いながら帰る。久佐木宅の前から海の方を見ると、まるでバリケードを築いた様に家や納屋が圧縮され行く手を遮っており、無惨とも何とも言いようのない光景であった。浜口磯次郎さん、羽里常一さん宅は半壊し、佐山さん宅は流失して跡形もなく羽里の隣にあった平港と共同の倉庫も流失していた。富田さん、大喜田正司さん、西漁協旧事務所（現西洲会館）等も悲惨極まる姿となっていた。

私方はアマ納屋（腰節を製造するため火を燻す建物）だけはなぜか無傷で残ったが他は全部壊され、私たちの寝起していた二階は落下し傾いていた。狂っていた潮も次第に落ち着くころ、母や叔父叔母達が帰り喜びも束の間、すぐに大掃除に取掛ったが余震にたびたび驚かされた。

昼近く満石のおじさん夫婦が食料品を携え見舞に訪れ非常に嬉しかった。余震や潮の心配で、その夜は杉王神社の通夜堂で泊まらせていただき、翌二十二日から一週間ほど一族全員が満石さん宅でお世話になり、なおも続く余震におびえながらも後片付けに励んだものだった。